人穴と白糸の滝

富士山の西側にも富士講巡礼者が自分たちの開祖と仰いだ長谷川角行（1541?-1646）ゆかりの霊場があり、一部の富士講巡礼者はこれらの場所も訪れました。彼らが利用した道は神野路と呼ばれ、富士山の北側と西側を結んでいました。

人穴

人穴は遠い昔の溶岩流によって形成されました。洞穴内は一部が浸水しているものの人が立てるほど広く、訪れた巡礼者たちはその神秘的で喚情的な雰囲気畏敬の念を覚えました。古くは13世紀の文献にこの洞穴についての記述があります。人々の中には、人穴は富士山の神である浅間大菩薩の住処であると信じていたものもあれば、地獄への入り口であると信じていたものもありました。

角行はこの洞穴内で修行をしたと伝えられています。18世紀には、富士講の巡礼者たちはこの場所を聖地として崇め、参拝するようになりました。現在、様々な富士講が建てた200基以上の石碑が洞穴の入口を取り囲んでいます。（入洞には事前予約が必要です。）

白糸ノ滝

白糸とは threads of white という意味です。伝えられるところによると、角行は人穴の前に、この場所を使って修行しました。また、この滝の類まれな美しさは芸術家たちの注目も集めました。池大雅（1723-1776）が1762年に描いた富士山を背にした滝の絵は、特にその構図において後人に影響を与えました。富士山を中央に配置し、日本各地の霊場でつくられた参詣曼荼羅という絵画を模した平井顕斎（1802-1856）による1843年の作品は、より抽象的で、神秘的ですらあります。